The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『夜窓鬼談』における動物物語に関する研究 : 「藤生救雀」 を中心に
Author(s)	聶, 晶
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 1-6
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69923
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『夜窓鬼談』における動物物語に関する研究
―「藤生救雀」を中心に―

聶晶

1　はじめに

『夜窓鬼談』は、幕末・明治期の漢学者である石川鴻斎[1]が書いた漢文怪異小説集である。上巻は明治 22 年（1889）、下巻は明治 27 年（1894）に東陽堂からそれぞれ出版された[2]。

この作品集には、様々なジャンルから取り上げた題材が含まれ、日本の昔話・民話・落語・浄瑠璃・歌舞伎以外にも、中国の南曲・唐伝奇・明清小説などともモチーフを共有している。その中でも、とりわけ動物に関する話は 18 編あり、作品集全体（88 編）の約 20%を占めており、動物の祟りや人間との異類婚姻譚はもちろん、動物の報恩譚や諧謔話なども多い。

この『夜窓鬼談』の下巻第 21 段の「藤生救雀」は、題目の通り人間がスズメを救うという話である。関西の書生である藤三郎は昼寝をした際、ある老翁から一族が大蛇に襲われたので、助けて欲しいと請われる夢を見た。目が覚めると、一匹の蛇が軒下にあるスズメの巣に向かって行こうとしているのを見た。そこで、藤三郎は蛇を捕まえてスズメを助けた。やがて、彼は某省の試補[3]に登用されたという。

この話は、夢の世界と現実の世界の繋がりという怪異を描いている。本稿ではこの「藤生救雀」を中心とし、作品の改作と描写方法などの側面から類話との比較・考察を行い、鴻斎の創作の特徴と意図を解明することとする。

2　先行研究

「藤生救雀」は、上に記したあらすじから分かるように、動物報恩譚である。動物報恩譚とは、動物が人間の恩に報いる話の総称である。特に怪異譚の中には、動物報恩譚に属するものが少なくない。この種の話には、動物が救助してもらったお礼として、恩人に力や大金などの援助を与える、健康や不老長寿を与える、出世させる、あるいは動物が人間の女性に変身して恩人と結婚するというプロットを持つものが多い。例えば、日本の民話「鶴女房」や「信太妻」、中国の昔話「白蛇伝」などである。

劉守華は『中国民間故事類型研究』[4]において、「ムカデの報恩」という民話と昔話をテーマとして「動物報恩譚」について論じた。劉は、このタイプの物語は、もともと動物が飼い主あるいは恩人を守るという類型の話（特に犬が飼い主を守る話）からモチーフを継承したものであり、昔から犬、トカゲ、蛙、ムカデ、蛇、狼、狐、虎などの動物に関する類話が多くあると指摘した。

なお、異類婚姻譚を主たる対象とする研究も数多くある。特に民俗学では「狐女房」や「鶴女房」などの物語をめぐって、多くの研究成果が生み出された。

ただし、これらの研究の中に、『夜窓鬼談』における動物報恩譚について考察したものは少ない。管見の限りでは、陳炳崑の「『見聞録』・『聖宗遺草』及び『夜窗鬼談』と『聊齋誌異』との比較研究」[5]と題する論文の中でしか言及されていない。陳は「花国奇縁」（『聖宗遺草』）と「藤生救雀」（『夜窓鬼談』）を翻案作品とし、原作である「蓮花公主」（『聊斎志異』）との比

---

[1] 1833 年生、1918 年没。本名は英、字は君華、号に嵩雲・芝山・石英などがある。専門の漢詩と漢文のほか和歌・俳句・茶道・南画にも通じていた。著書には他に『鼇頭音釈康熙字典校訂』、『画法詳論』、『詩法詳論』、『日本外史纂論』などある。

[2] 明治 27 年に出版された『東齊諧』の内題に「東齊諧、一名夜窓鬼談」とあることから、これが『夜窓鬼談』の下巻に相当することが分かる。

[3] 試補とは、官職に任命される前に、官庁などで事務の見習いをする者を指す。

[4] 劉守華・他『中国民間故事類型研究』華中師範大学出版社、2002。

[5] アジア社会文化研究会編『アジア社会文化研究』9、2008、pp. 115－126。

較を行い、ベトナム、日本の翻案作品と中国の原作との異同を分析した上で、それぞれの創作特徴をも検討した。その結論は、(1)「蓮花公主」と「花国奇縁」の中に古典からの詩文の引用がある一方、「藤生救雀」の中にはない、(2)「蓮花公主」と「花国奇縁」は恋愛物語である一方、「藤生救雀」は善には善の報いがあると説き示しており、勧善を主眼とする教訓物語である、(3)「花国奇縁」と「藤生救雀」における動物の擬人化は比較的合理的である一方、「蓮花公主」において蛇が蜜蜂を食べるのは不合理である、(4)「蓮花公主」と「花国奇縁」においては、主人公が動物の異世界に入る際に、その異世界の描写を通じて動物の特徴を暗示している一方、「藤生救雀」には、そうした描写は殆どない、という 4 点に纏められる。ただし、三つの話を同時に比較・分析したため、踏み込んだ説明が足りないように思われる。そこで、次節では「藤生救雀」を「蓮花公主」と詳細に比較し、その特徴を浮き彫りにすることを試みる。

3　類話との比較――「藤生救雀」と「蓮花公主」

3.1『夜窓鬼談』の「藤生救雀」

「藤生救雀」の現代日本語訳は以下の通りである（細部は省略）。

関西の書生である藤三郎（以下、三郎と記す）は、天徳寺内の北院に住んで学問をしている。（部屋の）屋根にはスズメの巣があり、中には五、六羽の雛がいる。三郎は時々巣の中のスズメに向かって米粒を投げ、雛たちはそれを啄ばむ。

それから一ヶ月が経ったある日、昼寝をしている三郎のところに、召使いのような男が現れた。うとうととしていた三郎だが、おもむろに男が床に跪いて「主人に災いがあるのですが、藤殿しか主人の危難を救うことはできませんので、ぜひ助けてくださいますようにお願い致します。」と言った。

三郎は男の言うことが全く理解できない。主人とは誰かと聞こうとすると、豪華な車がやってきた。乗らざるを得ない状況なので、車に乗ると車が空中へ浮き上がり、ある建物に着いた。きらびやかな部屋に入ると、椅子に座らされた。一人の七、八十歳の老翁が来た。老翁の長い髪の毛と髯は真っ白で、葛布の頭巾に道士のような服を着て、傍らに二人の童子が立っている。

老翁は頭を下げて、こう言った。「我等には、現在大変な災いが起こっております。どうかお力をお貸し下さい。風雲急を告げる状況ですので一刻の猶予もありません。日頃より恩恵を賜り、未だ恩返しをしていないのに、このようなお願いをするのは（申し訳ないのですが、）やむを得ないのです。どうかお助けください。いつの日か必ず御恩に報います。」

そう告げる老翁の頬に一筋の涙が流れた。これを聞いた三郎は、「私は普通の書生にすぎない。一人でお寺に借宿しており、友も妻も親戚もいない天涯孤独の身です。そんな私があなたの一族を救うことができるのか。」と言ったが、最後まで言い終えぬうちに、急に女と子供の走り回る音が響いてきた。

「敵がついに境界を越えました。逃げないと命がありません。」と叫ぶ声が聞こえ、建物の中に泣き声や叫び声が満ち溢れた。三郎は何事かわけが分からないが、一刻を争う重大な事態だということは察した。

「敵とは誰ですか。」と老翁に尋ねた。

「我が一族はこの地に永らく住んでおります。王侯に仕えることもないし、庶民たちとの付き合いもありません。平和な生活をしています。自然の恵みを受けて子孫を増やし、代々ここを住処として生きています。しかし、先頃より身の丈が百丈もある大蛇が現れ、その眼は鏡のようで、歯は鋭い刃のようです。鱗はまるで鉄板の如く固く、舌は猛火を吐き出すようです。我らの仲間をすでに五、六人も呑み込んだというのに、蛇は（全然姿は変わらず）瞬く間に彼らを消化してしまいました。昨日、蛇は西隣の同族を全員殺して、ついに我が一族のところまで来たのです。どうか先生お助け下さい。このままでは私たちは全員殺されてしまいます。」と老翁が語った。

三郎はこれを聞いて非常に驚いた。「こんな大きな蛇を相手に、私一人でどうやって戦うことができるのか。この人達を助けようとすれば、自分の命も危ない。『背に腹はかえられぬ』

という諺があるだろう。逃げなければ自分も蛇の腹の中に葬られてしまう」と考えた三郎は、急いで部屋の外へ出ようとした。しかし老翁と一族は全員、三郎の着物を掴んで放さない。怒った三郎が大声で叱ると、夢から醒めた。体から冷や汗が出て息も激しかった。夕日が軒を照らしている。

ふと気づくと数羽のスズメが騒いでいるのに気づいた。よく見ると、一匹の小さい蛇が軒の間からスズメの巣に滑っていき、巣の僅か一尺手前まで迫っている。一匹のスズメが蛇の尻尾に食らいついている。軒の瓦が高いおかげで、蛇は体の向きを変えることができない。

三郎は夢を思い出し、急いで長い竿を取り蛇の首を叩いた。すると、蛇は痛みに耐えかねて地面に落ちたので、ヨモギの縄で蛇をぐるぐる巻きに縛りあげた。そして蛇を後ろの山へ持って行き、「もしまた来たら次は命がないぞ！スズメのことを忘れるんだな。」と蛇を脅し、数町離れた場所に放してやった。その後、蛇が現れることはなかった。

その後、とある朝、スズメたちが三郎の部屋の屋根の下に集まって鳴いており、嬉しそうな様子をしている。その日、役所から三郎が某省の試補に登用されたという知らせが届いた。彼はやがて、数段の進級をしたという。

3.2『聊斎志異』の「蓮花公主」

「蓮花公主」のあらすじは以下の通りである。

膠州に竇旭という書生がいた。ある日、昼寝をしていると、一人の褐衣を着た男が榻の前に現れた。彼はついて来てほしいと言ってきた。男は竇旭を案内して入り組んだ道を何度も曲がり、やがて楼閣が建ち並んでいるところに着いた。そこには数多くの人家が軒を並べていたが、この世のものではないようである。続いて歩くと、立派な建物である「桂府」に着き、その土地の国王と思しき者に会わされた。国王は宴会を設けて竇旭を歓待したが、竇旭は非常に緊張していた。宴会中に、笙歌が聞えて来たが、鉦や鼓は鳴らされず、さらに、その笙歌の声も小さかった。やがて国王の発案で連句遊びが始まり、竇旭は国王の「才人、桂府に登る」の句に対して「君子、蓮花を愛す」という句を返した。驚いたことに国王の娘はまさに「蓮花」という名であったので、これは二人の間に良縁があるためだろうと国王が思い、娘を呼び出して竇旭と会わせた。美しい蓮花姫を見た竇旭は彼女の美貌に魅せられた。国王は「あなた様の世界とは違っているので、お恥ずかしい」と言いつつも、娘を彼と婚約させようとした。しかし、姫の美貌に夢中になっている竇旭は国王の話を聞いていなかった。宴会が終わると、最初の褐衣の内官が帰路に就く竇旭を送った。その途中内官は、なぜ蓮花姫との婚約について返事しなかったのかと竇旭を責めた。これを聞いた竇旭は非常に後悔した。そして、家に辿り着いたと思うやいなや忽ち夢から醒めた。

数日後のある夜、夢で会った褐衣の内官が再び竇旭を迎えに来た。今回は、国王が直ちに彼と蓮花姫を結婚させた。結婚式を挙げ、寝室に入ると、温かくて香りがしている。翌朝、竇旭がここまでのことはすべて夢ではないかと恐れたので、自分の手で姫の腰と足を測った。夫婦が話をしていると、突然大蛇が宮中に入ってきて、人々を飲み込もうとしだした。竇旭は国王に姫を任せられ、実家に連れていくと、姫は彼に別の家を築いて全国の人を移してくれと願った。しかし、竇旭がそれは無理だと思ったので何も答えなかった。すると、姫は号泣しながら、竇旭は役に立たないと言った。姫を慰めていると、竇旭は突然目が覚めた。

そして耳元で蜂の音を聞いた。変だと思った彼が夢の中のことを友人に伝えると、友人は蜂のために巣を作ってあげてはどうかと勧めた。すると、新しい蜂の巣が未だ完成していないのに、蜂の群れが外から飛んで入って一斗ほども集まって来た。竇旭が蜂の来た所を調べてみるとこれは隣の圃から来たものだと分かった。その隣の圃には二個の蜂の巣があり、三十年あまりも蜂が棲んでいた。竇旭はこの事情を隣の老翁に話した。老翁が圃にある巣を見てみると、その中に一丈の蛇がいた。老人はすぐに蛇を殺してしまった。その後、蜂は竇の家へ移って繁殖が盛んに行われており、何の異変も起こっていないという。

3.3「藤生救雀」と「蓮花公主」との比較

これら二つの作品のプロットを比較すれば、a. 夢で使者が主人公を連れて動物の世界に入る、b. 動物が災厄に巻き込まれて主人公に援助を求める、c. 主人公が現実に戻って動物を救うという三つの部分はほぼ同じである。しかし、「藤生救雀」には、主人公の動物による歓待、および動物との恋愛という要素が欠如している。他方、「蓮花公主」には恩返しの要素がない。

では、次に両作品の設定を比較してみよう。

3.3.1 動物の登場

「蓮花公主」では、作品の冒頭で主人公の竇旭が昼寝をしていた時に褐衣を着た見知らぬ男が現れる。蜜蜂（褐衣の男）の登場は突然である。

それに対して、「藤生救雀」では、主人公である三郎は平素よりスズメの雛に飯粒を与えている。つまり、スズメにとって彼は恩人である。この伏線があるため、災厄に見舞われたスズメが三郎の夢に現れて助けを求めるという展開が自然になる。

3.3.2 動物の世界の訪問

陳炳崑の論文も、この点について言及している。「蓮花公主」において、作者の蒲松齢は、竇旭が夢の中で訪れたのが蜜蜂の世界であることを暗示している。例えば、褐衣の男は竇旭を案内して入り組んだ道を何度も曲がり、着いた所には数多くの人家が軒を並べていたが、この世のものではないようであるという描写がある。これは蜜蜂の巣の六角形構造を思わせる。また、宴会中に笙歌が聞こえてきたが、鉦や鼓は鳴らされず、歌声も小さかったと記されている。これは蜜蜂の羽音を象徴していると思われる。その後、国王が娘を竇旭に嫁がせようとする際に「（あなた様）の世界とは違っているので、お恥ずかしいです。」と言うが、これは動物の世界と人間の世界とが異なっていることを表している。そのほか、竇旭が蓮花姫と結婚した後、その寝室は温かく、香りがしているという描写もある。これは蜂蜜の匂い、および蜜蜂の巣が常に一定の温度に保たれている（蜜蜂は変温動物であるが、蜂群が密集して運動することで熱を発生させ、巣の温度を約 35℃～36℃に維持している）という特徴を示している。

一方、「藤生救雀」には、主人公が夢の中で訪れたのがスズメの世界であることを暗示するような描写は少なく、より直接的であると言える。例えば、召使い風の男が三郎を迎えに来たとき、急に豪華な車が現れ、その車に乗ると車が空中へ浮き上がるという描写がある。また、老翁は三郎に助けを請う際に「日頃より恩恵を賜り…」と言い、その後、自分の家族を紹介する時にも、「我が一族はこの地に永らく住み、自然の恵みを受けて子孫を殖え…」と述べている。これらの描写は、三郎の部屋の屋根にスズメの巣があり、雛たちが日頃、彼から施しを受けているという事実と合致しているが、スズメの特徴には言及していない。

「蓮花公主」と「藤生救雀」を比べると、前者の設定の方がより巧みであるように思われる。しかし、筆者の考えでは、これは単なる作者の技量の問題ではなく、物語の導入の仕方と関係がある。すなわち、「蓮花公主」においては、蜜蜂の使者の登場が突然であるため、読者が物語の背景を知らない状態の下で、作者が暗示を与える必要がある。これらの暗示によって読者が異世界に対する想像を広げられるようになっている。一方、「藤生救雀」においては、最初に三郎が日頃スズメに米粒を与えているという描写があるため、読者は自然に話の展開とスズメを繋げることができる。つまり、鴻斎は、作品の冒頭で三郎とスズメの関係に触れたので、三郎が夢の中で訪れたのがスズメの世界であることをあえて暗示する必要はないと考えたのであろう。

3.3.3 恩返しのプロットについて

「蓮花公主」においては、竇旭と蜜蜂との間にはそもそも何の関係もなく、蜜蜂の世界を訪ねることや蜜蜂の国王が彼に娘を嫁がせることなど、全ては突然に起こった不思議なことである。その後、蛇の侵入に伴い、竇旭と蜜蜂の世界との繋がりは切られた。そして、現実に戻ってきた彼は蜜蜂のために新しい巣を作ってやり、蜜蜂の一族を救った。そして、隣の老人が蜜蜂の元の巣を開けると、その中には侵入してきた蛇がいた。つまり、「蓮花公主」のプロット

をまとめると、話の流れは以下のようになる。

夢で褐衣の使者が来る→竇旭が異世界に着く→国王に歓待される→蓮花姫と出会う→現実に戻る→再度夢で異世界に着く→蓮花姫と結婚する→蛇が来る→蓮花姫を連れて家に戻る→夢から現実に戻る→蜜蜂の巣を作る→蜜蜂が来る→竇旭が隣の老翁にこの話を伝え、老翁が蜜蜂の元の巣の中に蛇を発見する。

以上の物語展開が示すように、竇旭は蜜蜂を助けたが、恩返しをされてはいない。つまり、「蓮花公主」は動物報恩譚ではない。

一方、「藤生救雀」の物語の流れは以下のようである。

三郎がスズメに飯粒を与える→夢で褐衣の使者が来る→三郎が異世界に着く→老翁が蛇の退治を懇願する→夢から現実に戻る→蛇を捕らえてスズメを救う→三郎が試補に登用される。

スズメは三郎に援助を頼んだ際に、「今後必ずご恩に報い」と言った。そして、三郎が蛇を退治した後、スズメたちが彼の部屋の屋根の下に集まって鳴いており、嬉しそうな様子をしていた。その後、三郎が試補に登用され、程なくして数段の進級もした。作者の鴻斎はスズメが福をもたらしたのだとはっきり書いているわけではないが、試補に登用される前にスズメが集まって鳴いている姿はすでにこのことを暗示している。つまり、三郎がスズメを助けた後に良い報いを受けているので、「藤生救雀」は動物報恩譚であると断言できる。

3.3.4 主人公の性格に関する設定

「蓮花公主」の竇旭は普通の書生である。彼は偉い国王と出会った時に緊張しており、美しい姫を見た際には美貌に魅せられ、また、結婚の翌日に、ここまでの幸せはすべて夢であると恐れ、手で妻の腰と足を測る。これらの描写は、竇旭の一般的な若者としての行動を表現しているが、彼の性格を窺わせるものではない。

一方、「藤生救雀」の三郎は日頃よりスズメに米を与え、夢から現実に戻ってきた際に、スズメを助けて蛇を捕まえたが、殺さずに警告を与えるだけで放してやった。これらの描写から、三郎が善良な人物であることは明らかである。つまり、「藤生救雀」は動物に関する怪異譚であるのみならず、善い行いをすれば良いことが返ってくるという教訓を説く勧善の物語でもあるといえる。

3.3.5 援助された動物の種類

鴻斎が「蓮花公主」を翻案する際、登場する動物を蜜蜂からスズメに変更した理由には、物語のプロットが関係していると思われる。三郎は日頃スズメに米粒を与えているので、スズメとの間に恩恵を施す者と蒙る者という関係が築かれている。このため、スズメが蛇に遭遇した際に、三郎に援助を求めるのは自然になる。しかし、もし鴻斎が「蓮花公主」の設定を継承して「藤生救蜂」という物語を書こうとしたならば、三郎が蜜蜂に餌を与えることはできないので、彼と蜜蜂の間に上述のような関係が成り立たなくなり、話の展開に支障をきたしたであろう。また、上述の陳の論文でも言及されているように、蛇が蜜蜂を食うという「蓮花公主」の設定は合理性に欠け、スズメが蛇の餌食になるという「藤生救雀」の設定の方がより自然である。

4　終わりに

鴻斎は中国の類話からヒントを得て「藤生救雀」を創作し、主人公が夢で動物の世界に入り、奇妙な体験をした後、現実に戻ると同様の事態が起こるという不思議な物語を描いた。

『夜窓鬼談』の「藤生救雀」と『聊斎志異』の「蓮花公主」との比較によって、両作品の設

定上の相違が明らかにされた。「藤生救雀」は男女の恋愛の要素を省略し、主人公が善行を行い、そして善報を受けるという物語を通じて作者の勧善意識を表現した。「藤生救雀」と「蓮花公主」の最大の相違点は、「藤生救雀」は恩返しを主題にしていることである。主人公が最後に試補に登用されたのは、かつてスズメを助けたことがその理由になっている。その一方、「蓮花公主」では、竇旭によって助けられた蜜蜂が彼の恩に報いることはない。つまり、これら二つの作品は、人間が動物の世界を訪れ、その動物を救うという同様のプロットを使用しているが、その主題および創作意図は全く異なると言える。

参考文献：

石川鴻斎著、吾妻健三郎編『夜窓鬼談』東陽堂、1889。
石川鴻斎著、小倉斉・高柴慎治訳註『夜窓鬼談』春風社、2003。
陳炳崑「『見聞録』・『聖宗遺草』及び『夜窗鬼談』と『聊齋誌異』との比較研究」『アジア社会文化研究』9、2008、pp. 115－126。
蒲松齢著、張友鶴輯校『聊斎志異』（会校会注会評本）上海古籍出版社、1978。
劉守華・他『中国民間故事類型研究』華中師範大学出版社、2002。